

〈奥〉の考察

——貞慶『愚迷発心集』の心性——

川 本 豊

はしがき

本稿は「住居感覚」に関する研究の一環である。あえて住居論ではなく住居感覚論と位置づけ、具体的形態論からは少し距離をとり、精神的な視点からの捉え直しを試みる。

表―裏、外―内、などと捉えられる一方の側の裏・内などを総合した概念として〈奥〉と表記している。この〈奥〉という分析概念は、従来の研究では見過ごされがちであった作者の心情の内奥を最もよく捉えうるものと考えている。日本人の住居感覚として特徴的な〈奥〉を手掛かりに、中世の精神世界を読み解きたい。

一 〈奥〉について

横文彦氏が東京下町の「空間の襞(ひだ)」から説き起こし、その重層性は表と裏という概念では説明しきれないとして、〈奥〉を提示された。⁽¹⁾ここでは〈奥〉のもつ時間性にも着目し、

〈時間―空間〉の综合体として外在要因と位置づけ、感受する側の内在要因である〈身―心〉を含め、四つの要素の組合せとして〈奥〉をとらえる。

『讃岐典侍日記』の、故堀河帝の遺骨が安置されている香隆寺を訪れた際の「尋ね入る心のうちを知り顔にまねく尾花を見るぞかなしき」は、入口の向こう、まさしく〈奥〉に佇む故院のまなざしを受け留めた上での歌といえる。ここに〈奥〉からのまなざしの照射を認めることができよう。⁽²⁾

しかしこの〈奥〉は、自らの立ち位置からしか見ることができず、求めようとしてもするりとそのまた奥(向こう)へと移ることになり、〈奥〉への願望は永遠の目標にならざるをえない。〈奥〉の本質として、実体のとらえどころのなさ、つまり〈奥〉は感受できているが、そのものを実体として見ることはできないというパラドックスを内包している。

「日記」は、生活の記録であり、事実という具体性を持っていることは疑いない。よってそこでの考察は、具体的な行

為と、それによって引き起こされたメンタリティーに関する言説が基本的な対象となる。『愚迷発心集』は、仏僧による自己凝視の書である。⁽³⁾作者貞慶（一一五五―一二二三）は思惟の先端に位置し時代を牽引する側にある知識人であり、彼の自己を見つめるという行為以外には、具体的な行動の記述はない。しかし、題名が示すように愚を自覚することにより、発心することを神仏に表明することから、一種の願文の様相を呈しているとの指摘もあり、ある程度の類型性も備えているとも考えられる。ここではそのメンタルな動きのみから果たして何が見えてくるかを、問いたいのである。

二 「冥―顕」世界像について

さて「冥界―顕界」という世界観がいま問われ始めている。池見澄隆氏は、両者のまなざしの関係は冥界からの一方的被透視性をその特徴とし、「みえない―みられる」という齟齬性がその基本構造であるとする。⁽⁴⁾我々の立つ顕界からいえば、こちらからは見えないが向こうからは全的に見られているのである。江戸期の注釈書、良慶『愚迷発心集直談』にも「明らかなる処より闇に臨ば見る事能はず」とある。⁽⁵⁾中世は冥界のイメージが最大限に膨らんだ時代なのである。

この心理イメージとして大きな広がりを持つ「冥―顕」世界像と、住まい感覚として日常的でフィジカルな側面を持つ

〈奥〉の考察（川 本）

〈奥〉という分析概念とに類縁性が認められるのではないか。〈奥〉を鍵語に、平安期から鎌倉期の「日記」を中心に展開される「他界感覚」と「住まい感覚」との関係性を読み解くという作業により、心性の持続と展開を確認できるのではないかと考えている。本稿では「冥の照覧」と表現される神仏の視線を中心に考察を行う。以下、本文の考察に入る。

三 神祇等に白（もう）す

（一）敬んで、十方法界の一切の三宝、日本国中の大小の神祇等に白して言さく、（一四頁）

貞慶は建久四年（一一九三）笠置寺に移住する。『愚迷発心集』の著述はこの隠遁後であろうといわれている。引用はその冒頭部分である。そして末尾は「伏して乞ふ、冥衆、知見証明したまへ。仍つて結ぶところ右のごとし。敬んで白す。」という言葉で結ぶ。全体を通じて、冥衆に自らの心のうちを洗いざらい表白し、自己透徹を経て、最後に再び神仏に祈請して筆を擱く。そこには類型的な表現ではあるが、終始自照性の強い言説が見られるのである。「冥―顕」という中世における世界イメージのもと、顕界の住人は、冥衆から全的に「みられている」ということが明らかに信受されていることは疑いもないであろう。故に、ここでの「白（もう）す」はまさしく実体性を帯びているものと考えなければならない。

〈奥〉の考察（川 本）

四 「時間—空間」「身—心」表現

（二七）仏前仏後の中間に生れて、出離解脱の因縁もなく、粟散扶桑の小国に住して、上求下化の修行も聞けたり。

自分の立ち位置がここで語られる。古代インドの宇宙観による全体イメージのもと、南瞻部洲の周辺に粟を散らしたように散在するのが自分の位置する「小国—日本」と述べる。言い換えれば、釈尊が生まれたところと遙か遠くに離れてしまっているという、絶望的な「空間的」距離感がある。

そして「中間」である。釈尊の在世に漏れた悲しみのなか、次の弥勒の出現までを仏前—仏後と称して、いま自分はその中間に位置するという。ここでも本師釈尊とは、いかなる人智をもつてしても見（まみ）えることができないという、圧倒的な「時間的」距離感が横たわっているのである。

（六七）自ら人目を慎むと雖も、全く冥の照覧を忘れぬ。

身の上の過は、人目に晒され、みられることになる。しかし中世人にとっては、じつは冥衆からのまなざしが、人目には「みえない」、心のうちに明らかに到達し「みられる」ことが自明になっているのである。そのことが忘れがちになるという自己否定的な表現をとっているが、裏返せば、明らかに冥界からのまなざしを感受していることは疑いない。

五 「入れ子」表現

（八五）所以に、耿耿たる燈の影、なほ迷ひを頭はす便りなるべし、蕭蕭たる風の声、まさに心を観ずる基たるべし。

（九三）しかれども、先生に営まざるが故に、今は既に一文の覚悟なきがごとし。（二二頁）

ここでは、「ゆえに」とか「しかれども」といった接続詞的な言葉の繰り返しにより、まさしく自らの心の内奥へまなざしを向けている。これは次々とモノが少しずつ大きさを覚えて収まっていくな「入れ子構造」の一種ともいえよう。

（九二）聖者と云ひ、凡夫と云ひ、遠く外に尋ねべからず。浄土と云ひ、穢土と云ひ、遙かに境を隔つべからず。

（一〇〇）境界は是れ夢の所縁なりと聞けども、（二三頁）

「境界」という言葉に注目しなければならない。「境を隔つ」としての仕切りと考えてもよいであろう。しかし、もはやその境界性は希薄になってきている。「遠く外に尋ねべからず」として、仏教的には背反の位置にある、聖者と凡夫あるいは穢土と浄土をも、境を隔つべきではないと述べる。

（二三）いかに況んや、八万四千の毛孔、一戸に九億の虫類あり。我に属して沈淪して、出離の期を知らず。我もし浮むことあらば、彼もまた浮むべし。（二七頁）

再び自分の身体に注目し、その中に八万四千の毛孔があり、

さらにその一つ一つに九億の虫類がいるという。体内の虫類の総数は、もはや有限性を超えんとする膨大な数とみられる。そしてその一つ一つに思いをさせて我と虫との一体性を思い浮かべているのである。これは計り知れない数的規模の入れ子構造である。自らを拠点とした対話により、冥衆と二人称的關係を構築した貞慶は、「能所もし相応せば、何ぞその験なからん」と断定する。それは自分も「一子」に連ねられているとの確信からであろう。しかし「冥衆、知見証明したまへ」と最後にも述べているように、あくまでも「冥の照覧」の意識ゆえの結果であることは明らかである。

むすび

自己透視という作業において、外在要因「時間—空間」、内在要因「身—心」の四要素が交錯しながら円環を形成していく。「ゆえに」「ゆえに」と肯定的に、あるいは「しかれども」「しかれども」といわば逆説的に進みつつ、ある中心へとベクトルが指向する。そこから想起される状態を「入れ子構造」と表現している。中世の思惟にみられる世界イメージからも、見えざる中心（原点）が多くあることが伺えよう。しかし、貞慶が決して見落とすことがなかったのが「冥の照覧」であり、冥界からの一方的なまなざしの感受なしにはこの透徹した行為は成り立たなかったであろう。

〈奥〉の考察（川 本）

以上、中世人の思惟に表れる世界イメージとしての「冥—頭」構造の一端を確認した。そしてこの「冥—頭」という世界像と、住居感覚として設定した〈奥〉とが対応するのではないかと考えている。ここで見出されたアナロジーをもつて、より広い宗教意識を解明したい。

本文引用は、鎌田茂雄校注「愚迷発心集」（貞慶）『鎌倉旧仏教』日本思想大系一五 一九七一年 岩波書店による。なお便宜上、引用者により、岩波文庫本による節番号及び傍線を付している。

- 1 横文彦「奥の思想」『見えがくれする都市』鹿島出版会 一九八〇年（初出は一九七八年）。
- 2 拙稿「〈奥〉の精神史的考察—『讃岐典侍日記』（下巻）における時間・空間—」『佛教大学大学院紀要文学研究科篇』第四十号 二〇一二年。
- 3 多川俊映『貞慶「愚迷発心集」を読む』春秋社 二〇〇四年。
- 4 池見澄隆『慚愧の精神史』思文閣出版 二〇〇四年。
同 編著『冥頭論 日本人の精神史』法蔵館 二〇一二年。
「頭界」「冥界」および「異界」という概念は右序文に拠る。
- 5 高瀬承厳校注『解脱上人愚迷発心集』岩波文庫 一九三四年。

〈キーワード〉 奥、住居感覚、冥頭論、貞慶、『愚迷発心集』
(佛教大学研究員)